

末浄水場

石川県金沢市
JR北陸本線「金沢駅」から車で30分

Sue Water Purification Plant

資料提供: 1.3.7-12.金沢市企業局 出典: 5.6.『金沢市水道誌』 撮影: 2.4.大村拓也

金沢市最初の浄水施設

末浄水場は、昭和5(1930)年に開設された金沢市最初の浄水施設であり、現在も当時の浄水施設が稼働している。金沢市の水道敷設の動きは大正8(1919)年に始まるが、大正13(1924)年に、灌漑用水を依存している農民からの反対運動が起こり、第1期基本計画案は、市議会への提案が見送られた。その後、金沢市調整委員会は、17回に渡る事務局案を審議し、昭和2(1927)年に市議会に水道事業案件を上程した。大正8(1919)年から9年間という長い年月を経て、昭和3(1928)年ようやく着工に辿り着いた。上水道計画については、京都帝国大学教授大井清一を顧問とし、水源の選定が定められ、自然流下法式が採用された。大井の指導により、水道技師長であった石井一夫が実施設計を手掛けた。待望の起工式後も、用地の買収、資材の調達、浄水場の軟弱地盤や湧水、そして天災という苦難を乗り越えながら、ついに、昭和5(1930)年に通水を開始した。同年夏、末浄水場には、豊かな水を湛える沈殿池と濾過池を見ることができた。

浄水場内には、江戸期に造られた寺津用水からの導水軸と送水軸が交差する点に、東屋を配し、これを中心点として前庭が広がる。設計変更の浄水場構内雑工には、「浄水場沈殿池と同整備地との間に前庭を造る。広さ480余坪、花壇を設け花草を栽う。前庭の中央に池を穿ち噴水を設く。池の広さ32坪にして、沈殿池、濾過池等に発生する藻類の繁殖状態を研究するの便に供するものとす。背面の高陵には、吉野桜、「ひば」等を植えて崖の崩壊を防ぐと共に、場内各工作物の周囲等にも、躑躅、玉黄楊、玉伊吹、他行松等の灌木を植栽し、以て風致と美観とを添ふる事とせり」と記されており、当時の土木事業計画が技術的かつ芸術的見地により実施されていたことが分かる。実際の植栽工事には、サクラ244本、ヒノキ218本、ハイビャクシン類893本、サツキ類600本が含まれ、趣のある景観づくりが行われた。

場内は植栽ばかりでなく、建物の配置や意匠にも工夫がみられる。導水軸には泉水を配し、送水軸には左右対称にエメラルドグリーンがアクセントとなる浄水井上屋が立ち並ぶ。更にその先には、楕円形の形状をした浄水集合井上屋がアイストップとして配されている。場内全体の空間構成の高さはもとより、西洋式庭園を思わせる前庭や高い意匠性を凝らした上屋を見ても、当時の美に対するこだわりが見て取れる。(神山 藍)



1. 竣工当時の浄水場園地前庭



2. 現在の浄水場園地前庭 (国指定名勝)



3. 建設中の濾過池



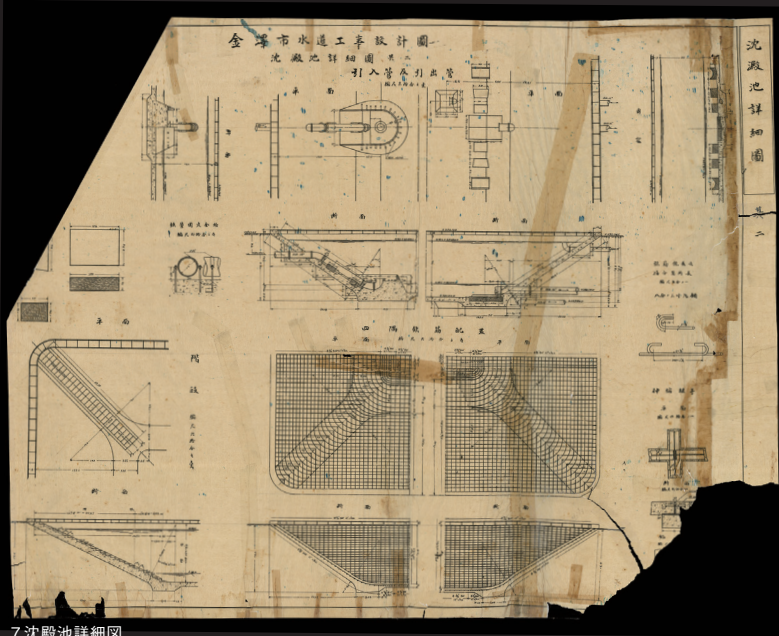
4. 現在の濾過池と浄水井上屋



5. 大井清一



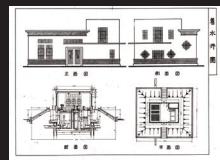
6. 石井一夫



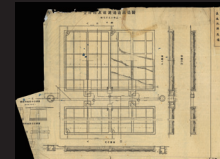
7. 沈殿池詳細図



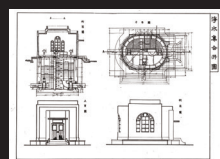
8. 浄水場平面図



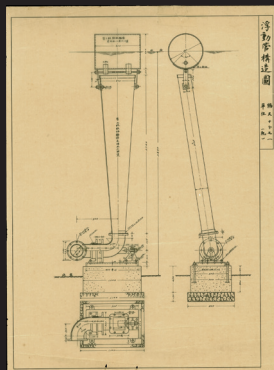
9. 着水井図



10. 濾過池構造図



11. 浄水集合井図



12. 浮動管構造図

関西エリア

- HANDS 053 淀川河川改修
- HANDS 054 琵琶湖疏水図面集
- HANDS 055 澁川橋梁
- HANDS 056 十三大橋
- HANDS 057 大阪築港 第一号繫船岸壁住友棧橋
- HANDS 058 毛馬閘門・洗堰・長柄運河
- HANDS 059 奈良駅舎
- HANDS 060 紀ノ川橋梁
- HANDS 061 布引五本松堰堤
- HANDS 062 余部橋梁
- HANDS 063 アカタン砂防堰堤群

